



近世の読書文化と

〈日本〉

講師
京都大学名誉教授

横田冬彦

会場 松阪市産業振興センター

松阪市本町2176

お問い合わせ 本居宣長記念館

059812110312

2024年
4月20日(土)
午後2時00分
から
3時40分

聴講無料

FREE

第41回鈴屋学会大会 公開講演会

私たちは、〈日本〉という国、その領域や歴史をそれなりに常識として理解している。それらは、近代以降は学校教育（国語や社会）で教えられ、新聞・TVのニュースといったメディアを通して日々確認・更新され続けていくのだが、知識人ではないふつうの庶民にとって、それはいつ頃から、どのようにして常識になったのだろうか。

江戸時代の庶民は、歌舞伎や浄瑠璃を見る時も、講談を聴いたり、軍記物語を読む時にも、たとえば「仮名手本忠臣蔵」は赤穂事件の舞台を室町時代に移し、吉良上野介を高師直に仮託してはいるが、それで混乱することはない。

17世紀に商業出版がはじまると庶民が本を読めるようになるが、同時に辞書や事典、地図や年表といったさまざまな参照ツールも出された。たとえば、室町時代には僧侶が経典などを読むための「節用集」という漢字辞書があるが、江戸時代にはいると、それらさまざまな参照ツールを総合的に取り込み、庶民読者のために1冊で間に合う絵入り日用百科事典へと衣替えした。

そこには日本地図や世界地図・年表もあり、〈日本〉というものがどのような空間的・時間的な枠組み（領域・歴史）をもち、そこにどのような国制的・文化的な内容（伝統）がふくまれているかを、データとして取り出すことができる。

その文化的伝統というところに国学思想がはまっていくのだが、それを思想家の思想史としてだけでなく、少し広くこうした社会的文脈のなかにおいてみたい。そうすれば、契沖—真淵—宣長—篤胤という展開だけでなく、そこにあったさまざまな歴史的可能性や社会的選択肢を見出だすことができるのではないかと。庶民読者の実例もいくつか発掘しながら、そんなことを考えてみたい。



横田 冬彦 よこた ふゆひこ

京都大学名誉教授、日本近世史。通史叙述として『日本の歴史 16 天下泰平』（講談社学術文庫、2009年）。『日本近世書物文化史の研究』（岩波書店、2018年）で徳川賞、角川源義賞、日本出版学会賞などを受賞。編著に『シリーズ・本の文化史 1 読書と読者』『同4 出版と流通』（平凡社、2015・16年）など。

4月21日(日) 10:00～ 鈴屋学会研究発表会 資料費 500円 会場 本居宣長記念館

- 「小津久足『陸奥日記』「遊行柳」条の表現—西行・芭蕉・氏郷を踏まえて— 皇學館大学大学院博士後期課程 楊瑩
- 「大垣久瀬川下里家資料から見る鈴屋門下」 中部大学大学院博士後期課程 樗木宏成
- 「春曙文庫所蔵伝嵯峨本古今和歌集の書き入れについて」 相愛大学 千葉真也
- 「本居宣長における大和魂の意味をめぐる」 日本学術振興会特別研究員 増田友哉
- 「契沖の釈教歌評—新古今公胤詠への書入に見える東密的姿勢についての検討—」 大阪産業大学 但馬貴則
- 「橋守部と佐藤方定」 中部大学 岡本聡